

---

# 超兵器グレイツ

闇木諒諧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超兵器グレイツ

### 【Nコード】

N0904I

### 【作者名】

闇木諒諧

### 【あらすじ】

ゼストン12年の大規模戦争の後、多大な損害を受けた軍事大国メルカにワノーが攻め込む。その軍隊に撃ち落されてしまった主人公エルズは敵の中間基地で巨大なロボットを見つける。

LOADING 1 非公開兵器（前書き）

ロボット系小説を書いてみました。ぜひ読んでください！

## LOADING 1 非公開兵器

ゼストン12年、極東の小国ワノーと西洋の軍事大国メルカが全面戦争を過激化させた。全世界が思ったメルカの圧倒的勝利。だが予想を反して、小国のワノーが勝利した。それは世界で最も能力者・アビリティーズ・が多く、国民のなかに3分の1以上ふくまれていたからだった。

彼らは戦闘において、多大な力を発揮し、小国ワノーを勝利へ導いたのだ。だが、この戦争で世界の人種偏見は国籍の違いではなく普通の人間・ノーマル・か能力者・アビリティーズ・かの区別になり、世界は混乱してしまう。この物語はこの波乱の世界を生き抜いた少年たちの話である。――

ここは世界最高の軍事大国メルカ。世界で最も面積が大きく、そして普通の人間・ノーマル・と能力者・アビリティーズ・の紛争が最も激しい国である。その国にある一人の少年がいた。

「けっ、あのエムツッぱげ調子のりやがって・・・」  
彼の名はエルズ・タミアツツ、メルカの大貴族タミアツツ家の長子だ。彼が言っている「エムツッぱげ」とは、父ウルク・タミアツツのことだ。実はエルズは能力者・アビリティーズ・なのだ。だが当然家の中で差別が生じ、エルズだけは遠くのミルトロ山の山頂に追いやられている。そして一族の中で唯一軍の最凶部隊、「ロスター」に所属している。

「まゝたやったの？エル兄。」  
話しかけてきたのはエルズの弟パトーだった。またやったというのは、エルズが父ウルクを能力・アビリティーズ・で気絶させたことだ。今回は年に一度の家参りなのだ。毎度のように、父から文句を垂れられたんだろう。丁度その時、軍から緊急入電がかかってきた。

「エルズ！ワノーがガウン島に攻めてくる、急いで戻れ！！」

「はっ！」

エルズは家を飛び出し、軍部へと向かった。

「隊長！状況は！？」

エルズは軍艦に飛び込んできた。見たところはあまりよくない。

「我等の出番、あるやもしれん・・・」

隊長ボウージャ・ハンモンは少し微笑んで、エルズに呟く。ロスタ  
ー隊長ボウージャは「ヴィータラグーンの奇跡」をなした名将であ  
るが、戦いに緊張感を全くもたない。エルズは、そんなボウージャ  
を憧れて軍への入隊を志願したのだ。

「よし、ロスター出動要請が入ったぞ。皆心してかかれよ。」

「イエス、マイロード。」

エルズは最新戦闘機ブリッツのパイロットだ。それ故、この戦いは  
絶対負けられないのだ。

「ブリッツ、出る！」

エルズはブリッツに乗り、軍艦から発進した。エルズのブリッツに  
は、他の戦闘機にない多彩な武器が搭載されている。例えば軍艦用  
重砲「ソプラス」、貫通アーム「ジドツカ」に両翼が切り離されて  
攻撃を仕掛ける「ジャックバンパー」をもっている。エルズは優秀  
な能力者・アビリティーズなのだ。

「ハイネット！撃てえっ！」

その合図ともに激戦が始まった。ブリッツは空から軍艦をめがけて  
重砲ソプラスを乱射するが、敵軍も負けじと砲撃を次々と放ってく  
る。そしてどうにか、軍艦を3隻撃破できた。しかし敵の追手が迫  
ってくる。

「ふん、低脳の普通の人間・ノーマル・が一人前に戦闘機に乗るな  
よ。」

追手のパイロットの名はオレン・カスタマン、ワノーのSクラス兵  
士の一人でその名は世界に知れ渡っている。彼の戦闘機はオレンジ  
色が特徴である。すぐにエルズも気付くが、逃げることもできない。  
「なんてむちゃくちゃな・・・勝てるわけがない。」

必死の抵抗を見せられ、オレンも手間取っているが明らかにエルズ

が不利だろう。

「落ちろお！ド低脳め！！」

ミサイルを打ち込まれたブリッツは、きりもみしながら近くの小島へ落下した。そして同時に、通信も途絶えてしまった。

「隊長・・・ブリッツの通信が途絶えました。」

その頃、落ちたエルズは奇跡的に無傷だった。いや、彼の能力・アビリティーを使ってダメージをゼロにしたのだ。

「なんだあ？これ・・・」

落ちたところには、見たことのないロボットみたいなものが大量にあった。倉庫のマークを見て、これはワノーのものであると確信した。

「これってNWか！」

NWとは世界に知られていない、非公開兵器のことである。とっさにエルズは、あの兵器を奪うことを思いついた。

「おっ、警備薄いじゃん。これなら！」

エルズは基地に向かって、突っ込んでいった。当然ながら、警備はそれに対応しようとする。

「普通の能力者・アビリティーズとは違っぞ。」

そう言つとエルズの影が動き出し警備の足元に当たると、警備たちは動けなくなってしまった。

「くそう！体が動かん・・・」

「どーよ、オレの能力・アビリティーの芸術の影・シャドウアーツは。今のはその一部で、拘束の影・シャドウゲイルだ。」

警備を難なく乗り越え、機体に乗ったが操作の仕方がわからない。

「どーなってるんだあ？・・・あぐあー！！」

機体の操作レバーらしきものに触れた瞬間、全身に耐え難い衝撃が走った。通常では考えられないほどの痛さだ。

「うぐっ、これって能力者・アビリティーズの細胞に反応するシステムなのか？」

「侵入者を排除せよ。」

その声とともに、この島の守備部隊全員が倉庫に流れ込んでくる。操作すらわからないなかで、敵に囲まれたエルズは頭をかかえる。

「こんのお、こうなりやヤケだ！」

やぶれかぶれに左操作レバーの左側のスイッチを押すと、腰につけた銃みたいなのを敵に向けて撃つたではないか。どうやら左のスイッチは銃撃系の武器が使えるようだ。しかも、黒い弾は自分の能力・アビリティーだった。

「この機体、能力者・アビリティーズ・の力をそのまま使えるのか。」

今度は、右操作レバーの右側のスイッチを押してみる。すると、剣撃系の武器が使えた。

「うっわぁ、剣までオレの力を使ってんの・・・」

その剣も黒い影に包み込まれていた。エルズはこの光景に驚きと感激を覚えた。

「おっし！覚悟しろよ、守備部隊。」

右足のペダルを踏むと機体は前進した。しかも、その速度はこの大きさで100km/時近くを出している。これは地上巨大兵器では、類を見ないスピードだ。

「どけどけっ！そうだ、この機体について聞きたいからな。誰か捕虜として連れていこう。」

そこに逃げ出していた研究員らしき人物を捕らえて、飛んできた方向を見た。

「これって飛べるかな？おい、空飛べんのかよこれ？」

「左右の操作レバーを同時に、上に上げれば飛べる・・・」

研究員はハキハキと答えた。殺されるよりまだと踏んだんだろう。そして軍艦に通信信号を送った。

「おお、エルズ。無事だったのかね・・・」

「はい。ですが、ブリッツは大破してしまいました。しかし私は、それ以上に素晴らしいものを敵の中間基地より持って帰ってまいりました！」

「ほう、それは？」

「見ればわかります。」

そういつてあの機体を持ち帰ってきた。隊長ボウージャや隊員たちも啞然としている。

「こんなの、初めて見たぞ。しかしよくやった、レイヴ勲章を与えよう！」

エルズは名將の証レイヴ勲章を憧れの隊長、ボウージャから与えられた。

LOADING 1 非公開兵器（後書き）

よかったら、ご感想をお願いいたします。

## LOADING 2 超兵器グレイツ

あれから捕虜の研究員から、あの機体についてさまざまなことを聞き出した。

「名前は超兵器グレイツか。しかしワノーが能力者・アビリティーズ・専用兵器を極秘で開発していたなんてな。」

その超兵器グレイツは、能力者・アビリティーズ・の細胞に反応するまったく新しい兵器のようだ。

「だけど、よくこんな少年が国のNWをあれだけ動かせたもんだ。」  
研究員は感心していたが、無駄口叩くなとエルズにはたかれた。

一方で、ワノー軍は大騒ぎしていた。なんせ、自軍の兵器が敵に奪われてしまったのだから。

「なんとしても！あれを回収せよ・・・！」

そういつて、ワノー軍は超兵器グレイツをエルズたちのメルカ軍に差し向けた。それはメルカ軍も気付いた。監視のマークス・デイドンはその状況を伝える。

「グレイツ！数は、30機以上です！！」

「そんな！1機だけでも圧倒的なのに・・・」

エルズはがくりとうな垂れた。この超兵器グレイツの、とてつもない破壊力を乗っついていて1番わかっていたから。でも対抗しないと犬死になっってしまう。

「よし、オレが行こう。この機体は本国にそのまま持ち帰るべきだ。」

そう提案したのは、エルズと同じロスターのエース戦士ミア・ガツハ口だ。彼はエルズと同期に軍に入ったので、養成学校時代からの親友だった。

「フォルヴオの機動力なら、まだ互角にいけるはず。」

隊員たちは大丈夫かとも思ったが、エルズは任せたと言った。

「フォルヴオ、飛ばすぜ。」

勢いよく、ミアは飛び出した。そしてかかんに攻撃をしかける。

「うおおおっ！」

「効くかって、そんな弾。」

弾幕をいとも簡単に防がれてしまった。防御したグレイツは球体状になっていた。

「この野郎、ワッフ・トネコに弾ぶち込むたあいい度胸だ。」

「やめるよ、ワッフ。アイアンは最新鋭の機体だ、傷つけんなよ。」  
そういつてワッフとレイド・ジョーズはミアのフォルヴォに襲い掛かる。しかし、すばやい動きに二人はてこずる。

「よし、スピードならこつちが上。なら接近戦でどうにかなる！」

ミアは二人に突っ込むが、あっさりとかわされる。そして、怒ったワッフは能力・アビリティーを発動した。

「おんどるあ！磁石鉄球・マグネットボール・とくと味わええい！」  
フォルヴォは瞬間に、アイアンに吸い寄せられる。磁石鉄球・マグネットボールは、特定の金属でできたものを吸い寄せ攻撃するのだ。これでは、機動力もくそもない。

「うっ……」

「残念でーしたー。」

エルズが通信でそう伝えると、艦隊からミサイルが発射された。フォルヴォと同じ金属でできたものなのでただのミサイルが、自分の力のせいで追尾弾になってしまったことにワッフは気付かなかつた。すべてのミサイルが被弾する。

「うぐぐぐ！その虚をつく攻撃、エルズ・タミアッツかあ！？」

ワッフとエルズは、国際軍人養成学校時代の旧友だ。それゆえ、弱点も知っている。なおも容赦なく、エルズはミサイル攻撃を続けさせる。

「遠慮なんかしねえよ、ワッフ・トネコ！」

「させないよ、そんなマネは。」

レイドは機体の右腕をエルズたちの軍艦につけた。すると、軍艦がシステムダウンをおこした。レイドの能力・アビリティーである、





### LOADING 3 祖国の裏切り

今回は久々に休暇をもらったエルズは学園にいた。ユヒピアム国立学園、メルカ随一の名門校だ。入ってすぐに今までの単元をすべてやらされ、エルズは来るんじゃないかと後悔していた。

「よお、ご苦労だったな。ケリつけてなかったから、ケリつけようぜ。」

そういつてUNOをもってきたのは、ヴァンカー・シュキラだった。エルズの初めての友達で、シュキラコークの御曹子だ。ヴァンカーによると、シュキラ家の男は代々遊び好きらしくエルズもそれにつきあっているわけである。

「UNO最初からやるか、途中からだとつまらないからな。」

エルズの意見を素直に受け入れたヴァンカー。すると、ほかのみんなも集まってきた。やらせてくれ、

いれてよーと、次々に言い出す。ヴァンカーは、全員にある提案をした。

「優勝したやつはあの超兵器、グレイツをエルズから進呈してもらえろぞー!!」

その提案に、エルズはこの上なく動揺した。グレイツは量産ができておらず、あの乗っていた一機のみだったからだ。これは負けられないとかのレベルではなく、もう負けてはならないデスゲーム状態になってしまった。

「あんなろー、ふざけたことぬかしやがる。」

UNOをはじめて手札を引いたとき、エルズは愕然とした。すべてが赤に染まっていて、まるで血塊のようだった。しかも、6と9とドロー2と4すら入っていないという過酷極まりない手札だ。赤以外だされると、どうしようもない。

「よし！これが初手だ。」

エルズは勢いよく、赤の3をだした。隣にいたヴァンカーは、いき

なりドロ―4を出してくる。これでは、ヴァンカーの隣にいた男子がかわいそうだ。

「へへ〜ん、色は緑だよん。」

「いきなり4枚引くなんて・・・」

その男子が負けじと、緑の5を出す。その隣の天パーの男子は青の5を出す。これではオールレッドのエルズは出せない。パスして引くと、そのカードも赤だった。

「ナニコレ？ノロワレテンノ？ネエ・・・」

ヴァンカーはそれを見抜いて青のリバースを出す。オールレッドなのでエルズは出せず、カードをまた引く。が、それも赤だった。エルズは涙目になっている。右隣の天パーが赤のスキップを出してくれた。これで、少しは変わると思ったが一瞬にしてその期待は壊された。

「緑のスキップー！！」

来たと思つたのに、色が変わられたうえ、飛ばされてしまった。そして一方的なワンサイドゲームになった。

数ターンたったが、未だオールレッドから抜け出せない。エルズから魂(?)らしきものが抜けていた。その時、チャイムが鳴り先生が入ってきた。コワモテのパドック・グジェニー先生だった。

「おおおおおおお！アブナカツタアア〜。」

エルズはほつとした。授業に入れば、UNOは無効となるからだ。

先生は体育館に来るように言った。

「体育館？あの人数学だよな？」

疑問を持ちながら、体育館に入った。全校生徒が集まっていて、巨大なモニターが配置されている。

そこに一人の男が映し出された。この男こそ、第34代メルカ国王アンサー・ユ・メルカだ。

「皆さんに大切な話があります。このメルカと、ワノーは戦争を行います。ワノーは能力者・アビリティーズが多いからって調子に乗って、許可なく領土に入り込み基地まで造つたのです。私は能力

者・アビリティーズ・の横暴を許しません！だから！この国の能力者・アビリティーズ・はすべて抹殺しなければならない！これは勅命です、能力者・アビリティーズ・を殺しなさい！！」

皆の視線がエルズに向けられるが、エルズの姿はそこにはなかった。エルズは屋上にいた。

「仕方ねえさ、自分の命にや変えられない・・・」

エルズは上で大きな影の塊をつくっていた。エルズの十八番原爆の影・シャドウアトミック・だ。それを、校舎にぶつける。大爆発が起こり、学校は跡形もなくなっていた。

「全員死んだかな・・・生きてるやつなんていないよな？」

一人の英雄は、大量殺人犯に成り果てた。

エルズは国境付近に向かっていた。ミアから通信が入り、国境付近に來いと言われたからだ。

「国境つて、ここから出る気か？」

祖国から出ると思うと、エルズは少し不安になった。そして、待ち合わせ場所国境付近に着いた。

「エルズ、よく来たな。だが時間はないぞ、もう少しで憲兵どもがここに来る。隣のクリア民主主義共和国へ行くんだ、これからな。」  
他にもロスターのメンバーが揃っていた。全員国王の勅命から逃げてきたのだ。

「あそこは能力者・アビリティーズ・を尊重してくれるから匿ってくれる筈だ。」

こうして皆王国否、祖国から逃げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0904i/>

---

超兵器グレイツ

2010年10月9日08時23分発行